

# 新 春 インタビュー 将来的展望に立つ交流を

## 日本だけの繁栄は不公平

東京外国語大学 教授 中嶋 嶺雄氏

中嶋嶺雄東京外国語大学教授は日本の中国政治研究の第一人者といわれ、海外での活動も華々しい。また、留学生からの人気も高く、研究室では大勢の留学生が学んでいる。当編集部では「留学生の受け入れ問題」「日本の国際化」などについて先生にお話を伺った。

### ゼミの半数以上が留学生

——中嶋先生の研究室の留学生についてお話し下さい。

中嶋 私のゼミナールには留学生が非常に多リピンからです。今年度の私の大学院の国際関係論ゼミナールの半分以上が留学生です。それから研

究生も五人います。来年度はバングラディシュ、インドネシアからも来る予定です。——やはり、先生のお名前を募って来る学生が多いわけですか。

中嶋 研究生志望の申し込みが毎日のように来ています。志望が多いことから、どういう研究計画が

あるかなどをきちんと聞き、論文を出していただいた上で、受け入れを決めています。しかし、留学生指導はすべて個人の負担になります。文部省のシステムでは何の予算的措置もありません。

——研究生の中にはほとんど授業に出てこない者もたまにはいます。これは就目的で日本に入ってくるケースかもしれません。しかし、それは例外であって、ほとんどの学生は非常に熱心に勉強してい

ます。中には日本人よりもいい成績で大学院に入る研究生も出てきています。全くハンディをつけず、同じ形の試験をしても日本人学生よりも優秀な学生もいるわけです。

それから、中国、台湾、韓国などからの留学生は全般的に日本語がよく出来ます。ただ、英語力が弱いという学生が多いです。

共通言語としての英語をマスターすることが、日本にいる東アジア諸国の留学生にとって大きな課題だと思えますね。

他のアジアの英語を公用語にしている国つまり香港、シンガポール、フィリピンなどからの留学生の場合、かなり英語が出来るとみていいですが、社会科学を勉強する上で役立つ英語とは必ずしもいえないと思います。

オーストラリア国立大・パブリック政治学客員教授などを歴任。著書に、文化大革命の分析でサントリ学会賞を受賞した「北京列列」ほか「現在中国論」「中ソ対立と現代」など多数。最近著は「中国の悲劇」(講談社)。



なかじま・みねお 一九三六年五月十一日、長野県松本市に生まれる。六〇年東京外国語大学中国語科卒。六五年東大大学院国際関係論課程卒。現在、東京外国語大学教授、社会学博士。この間、外務省特別研究員(在香港)、

生をもつと大勢受け入れることは是非、必要です。日本はそうすべきです。中嶋 曾根さんの「留学生十万人受け入れ計画」は、中曾根さん一流のポーズであって、何ら具体的な裏付けのないアドバルーンに過ぎなかつたと思います。現在の日本の文教政策では留学生が大勢いても定員が増えるわけではない、勤務外の手当が出るわけでもない、留学生をお世話する職員も増えないなど一切何もやっていないわけでは、留学生の勉強のための条件はまだまだ貧困です。国費留学生をもつと盛んにすべきです。

す。ホームステイはアジアからの留学生にとっても受け入れる日本人の家庭にとっても貴重な異文化体験になります。受け入れ側の家庭環境や住宅事情もありますが、あまり無理に高額な金を支給するのはいけません。受け入れ側にもある程度の奨学金が渡るようにはすべきです。また、国内法を改正して、ODA資金を国内でも使えるようにし、留学生に供与することもできるはずだと思えます。それから、我が家もやっています。ホームステイをもつと盛んにすべきです。

戦後、日本ではアメリカに多くの人が留学し、それが日本の発展の大きな原動力となりました。また、台湾、韓国がこれほどまでに発展したのは欧米留学組がいたからです。日本に留学している学生たちも自分の母国を背負う時代が必ず来ますから、我々も将来的な展望の中で留学生との交流を進めていくべきです。また、留学生も日本にきた以上、やはりきちんと勉強してほしいと思います。同時に、日本社会の良い点も悪い点もしっかり学び取って、自分の母国の発展のために役立てるべきです。

——日本も痛みを感じる必要があるということですね。

中嶋 このまま日本が繁栄を続けていくことは、あまりにもアンフェアです。国際化することは、何も日本文化の純粋性を失うことにはならないと思いま

す。——日本も痛みを感じる必要があるということですね。中嶋 このまま日本が繁栄を続けていくことは、あまりにもアンフェアです。国際化することは、何も日本文化の純粋性を失うことにはならないと思いま

## 日本の開国は宿命 現代は国際的相互依存時代

### 国際化にはコストがかかる

——最後に、日本はこれまでに異民族との接触がなかったわけですが、

——最後に、日本はこれまでに異民族との接触がなかったわけですが、